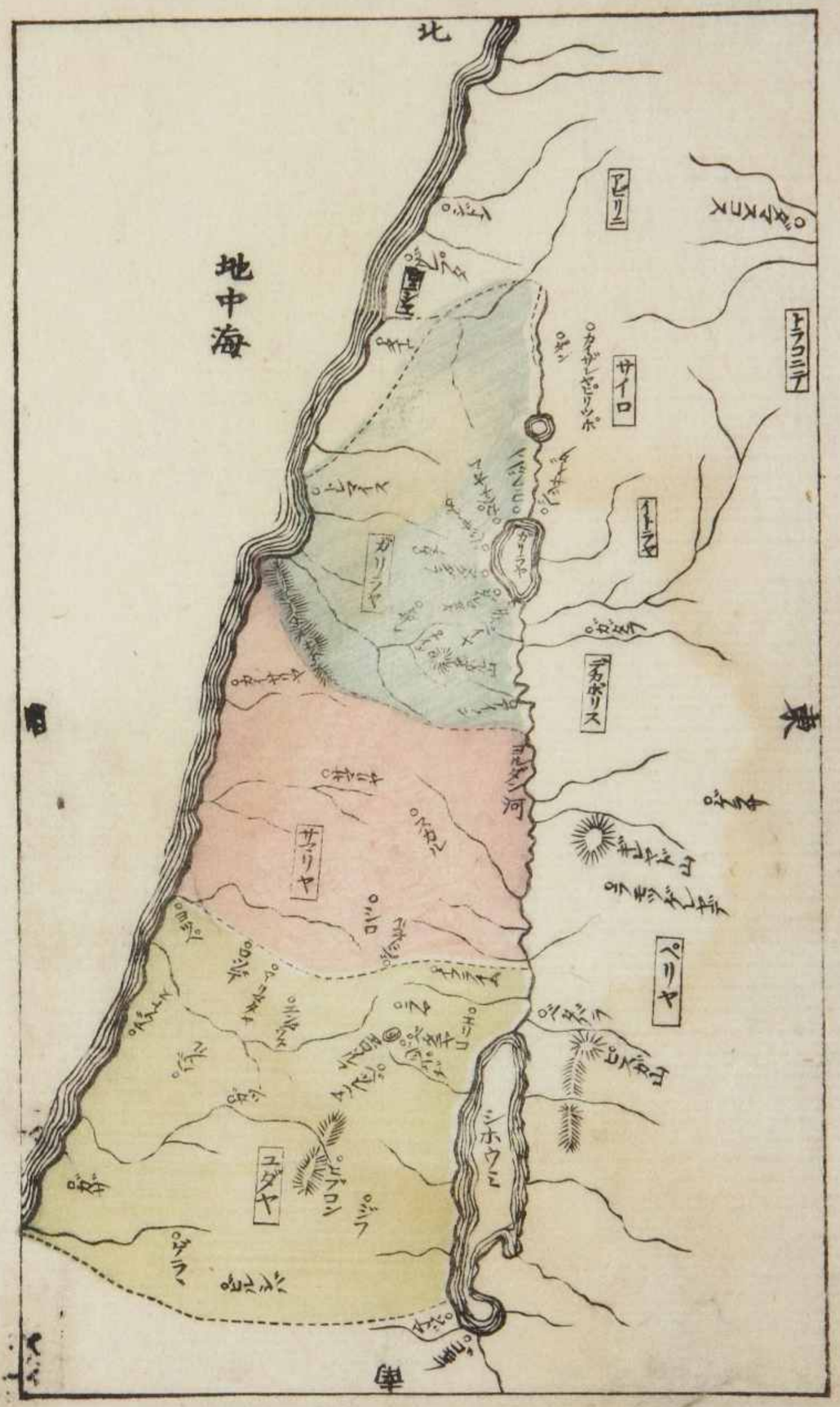
新約聖書馬太傳

全

02-HE
海老澤文庫

02-HE
2297



新約聖書巻之一

馬太傳福音書

第一章

大阪川口居留地
英二番館禮拜堂

横浜
住吉町五丁目
書肆
屋誠斎

一 アブラハムのもろ〳〵ダビテのもろ〳〵耶蘇キリストの系譜

二 アブラハムイサクをうみイサクヤコブをうみヤコブユーダとその兄弟をうみ三ユーダ

タマルのもろ〳〵にパレスとザラをうみパレスヱスロンをうみヱスロンアラムをうみ四アラン

アミナダブをうみアミナダブナーソンをうみナーソンサルモンをうみ五サルモンラカブの

もろ〳〵にボーズをうみボーズルツのもろ〳〵にヨベデをうみヨベデイヱツサイを

うみ六イヱツサイダビテ王をうみダビテ王ウリヤの妻のもろ〳〵にソロモンを

七 うゝソロモン ロボアムとうゝロボアム アビアとうゝアビア アサフとうゝ八アサフ
ヨサパテとうゝヨサパテ ヨラムとうゝヨラム ヨジヤとうゝ九ヨジヤ ヨアタムとうゝ
ヨアタム アカズとうゝアカズ エセキヤとうゝ十エゼキヤ マナセとうゝマナセアモン
とうゝアモンイヨシアとうゝ十一バブロンようつされるゝとき イヨシア イエコニア
とその兄弟とうゝ十二バブロンようつされるゝのち イエコニヤ サラチエルとうゝ
サラチエル ゾロバベルとうゝ十三ゾロバベル アビウデとうゝ アビウデ エリアキンとう
ゝ エリアキン アゾルとうゝ十四アゾル サドクとうゝ サドク アキンとうゝ アキン
エリウデとうゝ十五エリウデ エリアザルとうゝ エリアザル マツタンとうゝ マツタン
ヤコブとうゝ十六ヤコブ マリアの夫ヨセフとうゝこの マリアより

キリストとゞるゝる耶蘇うまれゝるまゝ アブラハムより ダビデまゝ
での歴代をべて十四代まゝダビデより バブロンようつるまで十四代
まゝバブロンようつりてより キリストまで十四代ありそゝ耶蘇キリ
ストのうまれたまふことさのごゝ その母マリアゝヨセフと契約し
ていまゞいまだとゝざるゝ聖霊に感じてゝるみこと
あるゝれ ゝ十七その夫ヨセフハたゞしき人なれバこゝをとゞ
まるこゝをうつせどのそふ離縁せんとおもひゝて
このこゝをゆめゝ居けるゝとき主のつかひ夢のゆめに
らゝれていひけるハダビデのそゝヨセフよなんぢの妻マリアを

めうとおそるゝなかれふたりをバうまみこのハ聖靈よ
りなりうまれ子とうまんその名を耶蘇とつけべし
その民をその罪よりすくはんとまことあり
預言者よりて主のいひしこと
をそ子とうまんその名をヨシヌエルとつけべしといひしこと
ゝあるりその名をゝけバ神とともにあるのいとあり
ヨセフ目さめて主のつかひの命ぜしごとくしてその妻
をめとりしが初子のうまれまで交合せざりしてその
その名を耶蘇とつけり

第二章

さて耶蘇ハヘロデ王のゝとき ユダヤのベツレヘムにうまれたまひしゝ
ゝ博士たちひがしのかたよりエルサレムにきたりていひけるハ
ユダヤ人の王ゝとうまれたまひしのハいづこにあるやこゝ
らひがしのかたにてその星をみたれバうまを拜せんときたれ
りとヘロデ王ことをきゝていとあわてまたエルサレムの民もこゝろ
りをそべその祭司のかしらたちのゝやをあつめてそれに
ゝひけるハキリストのうまるべきところハいづこにあるやといひ
けるハユダヤのベツレヘムなりそハゝのもちゐられしことを

ユダヤの地ベツレヘムよなんぢハユダヤの郡中(ぐんちう)にいとちいさきものよあゝなんぢ(汝)バラヂイスラエルの民をやなふづき君(きみ)そのうちからいでんといふなり(七)においてヘロデひそかにふくせたちまちび星のあらはれしときをくわしくうかがひてまつとベツレヘムへつかはさんとていひたるハゆゑて嬰兒(えいじ)のことをくわしくたづねてこれよあるで(ゆき)ともきゝゆきてこれを拜せん(をがん)あるこれをつげよ(九)まつ王の命(めい)をきゝてゆけりまたひとつの星(ほし)にさきだちてゆきてその子のをるところまでゆきてそのうへとゞまりぬ(十)まつこの星(ほし)をみてよろこびたること(十一)

家(いへ)にいりてをるこのその母(はゝ)マリアとともにをりてひれ伏(ふし)てこれををがみ(拜)その宝(たから)をひらきて禮物(れいもつ)黄金(こがね)乳香(にうかう)没(もつ)

藥(くすり)をさゝげたりかくてゆめにヘロデへつかはされしものつげをうけてかのくにをさりてのちまた主(しゅ)のつかひヨセフのゆめにあらはれていひけるハヘロデをきゝてをさゝげたりかくてをるゆゑにおきてをるこのこどもとその母(はゝ)をつれてエジプトへにげさりエジプトにあるあいだもめさんまでかくこれよ(西)ヨセフおきて夜(よる)をるこのこどもとその母(はゝ)をつれてエジプトへゆきヘロデの死をるまでそこにをれりこれハ(十五)

げんーやようて主の子をアイグプトよりよびいだせり
とのたまひしようにてんしあらわるり[五] ようにヘロデようせよあさむら
きようをもりおわひようりんとうせようくたた
づようようにもうづてベツレヘムとその さかひのうちなるとしを
ごと二歳より以下のものをことごとくころせり[六] げんーや
ヨレミヤのいへるなげきかなるーこらくうきようるこえこゆ
ラケルその子どもとなげきまどそのこどものなきにうりて
なぐさめどいひーようるこうりヘロデ死ーうるバこよる主のつ
ひアイグプトようそゆめようヨセフにあらわれていひけるハおきて嬰

兒くその母くとぶさて イスラヘルの地にゆけとるべきのいのちをもとめ
むるものハくや死せり[二] をきくらいおきておさなごとその母くとふ
さへイスラヘルの地にいるるアルケラヲその父ヘロデにようりてユダヤの
王くうりとそこへゆくをおそれきゆめにつげをうむりて
ガリラヤのうちにさけナザレといふるむくにうりてうたにをるナザレ
人となづけらるんとうげんーやようていいれーうるるさあな
る、

第三章

そのころ洗禮とさづくるヨハン子ユダヤの野にようをしめて

いひろハ天國ハちかきよあもバ悔あらためこれハ主の
うちをそなへそのうちをなをうくせよと野のようづる人のこえあ
りてよげんしや ヱザヤがいくれハこの人なり四このヨハン子く
身よらくだの毛ごろもを着腰よ皮のおびをむすびその
食物ハ蝗と野蜜なり五そのときにおいてヱロソルマまゝユダヤ
ゝぞつてまゝヨルダンの四方しゝり人くいでゝヨハン子よいろ
六そのつゝを懺悔ゝまよりてせんきいをヨルダンよそうけ
ゝりそのせんきいよパリサイおよびサドカヒの人くおゝくゝ
きりをうてそきよいひけるハ蝮のたぐひおこゝんとする怒

とさるとゝまつなんぢらよちゝめゝうぞやハさきバ悔あらたむ
ろよかのようごとき實をむすべよ九ゝまてゝの先祖よアブラハムありと
いゝゝゝゝをろろよ思ふなれいゝとおまバゝまなんぢら
よゝゝん神ハゝくゝこの石をもてアブラハムの子とのせバあり十今
斧ハ樹の根よおるをゝてゝゝき實をむすべゝ樹ハきゝれ
て火よなげいまゝるゝれハなんぢらのくひあらむるよつい
て水をもつて汝らよせんきいをさづくゝまゝりのちよきゝう
んものハまよまゝれまゝれハその履をとるゝまたるぞその
人ハ聖靈と火をもつてあんらゝよせんきいをさづけん十二その箕を

その手よりてその庭をきよめあそのゑとあつめて庫よりそのうつをことえざる火をそやくべし十三のちさ耶蘇ヨハネよりて洗禮をうけんためガリラヤよりヨルダンよりたまり十四ヨハネいなをていひけるハれハ主よりせんきをうくべきものなるよへつてわれよつきたまうんや十五耶蘇こたへていひけるハいまゆるせよかくのごとくこれらもべてのたゞしきことハつとめるべゝぞとこたにおいてヨハネよるゆるせり十六耶蘇せんきをうけこゝちる水よりあがりしにこの天をまるひらけ神の靈鴿のごとくくりてそのうへにくるをこれまこと

こゝに天よりこゑありてこれハこれをこゝろよかるひこれをこそ愛子なりとのたまへり

第四章

そ耶蘇あくまにこゝろみんためこの聖靈に野のうちびきわたり四十日夜もひるも食ぞのら飢たりこゝろみるそのうまるこゝろみていひけるハなんぢ神の子ならばこの石をぱんとなるまと命ぜよたまへこたへていひけるハ人ハぱんのみにていきるべからず神のくちよりいづるすべてのことばによりてもたるべしとみをこゝろつまめき殿

のいでゝたにてせそいひけるハあんぢも〜神の子なゝバ身を
あげおとせいろとあるバなんぢがあるそのつひちゝ命
ドたゝふて足の石ゝ当ぬやうゝその手ゝそなんぢとたを
けんとゝるゝれゝり耶蘇れるいひけるハ主ゝなんぢの神をこゝろ
むべゝぞとゝきゝるゝれゝりとハあくまゝをいとたゝさ
山ゝつゝきゆき世界の國〜とその榮ゝとゝをそなんぢ
ゝ〜ひまゝてゝゝを拜さバこゝをゝるなんぢゝり
あゝんといゝり十ゝにおいて耶蘇ゝゝいひけるハサタナのひ
ゝ主ゝるゝんぢの神を拜しゝでそゝこゝつゝべゝとゝる

さゝれバゝりと十一やゝてあくまゝれをくゝるゝゝつゝひゝら
ゝゝりてゝゝゝゝゝゝゝり十二さそて耶蘇ヨハン子がとゝゝゝれゝるを
ゝゝてガリラヤへゆゝ十三ナザレをくゝるれザブロンと子フタレムとのさゝ
ひなるゝゝみべのカペナオムゝいゝりてゝゝにをる十四ゝゝげんゝやヨザヤ
のゝとバゝゝザブロンの地と子フタレムの地とゝゝゝゝべゝてヨルダンのひゝ
異邦人のガリラヤくゝゝきゝふをゝる民ハおゝひゝるひゝりを見死
蔭のゝゝゝゝゝゝゝ

のうみべをあゆこペテロといふシモンとその兄弟アンデレとり
海にあみをうつをこれハ漁師なり九
よいひけるハ我ら人をとるべくなれなんぢらを人をとるものの
とあるこん十 まもなくあみをすてこれにしたがふ三そのこと
ろからをみげるふねの兄弟ゾベダイの子ヤコブと
その兄弟ヨハネ父ゼベダイとともに舟にあみをつくろふをそ
まもなくよびけるこれもやがて舟と父とをおきて耶蘇
にしたがふ三 耶蘇ガリラヤをあまねくめぐりその會堂
にをしへ天國の福音をとなへまた民のうちにあ

のやまひをそのほどこしをいやせり四 その評判あまねくスリヤ
にひろまりしかバ人ぐをそのもとにつれてきたりのとさまざまのやまい
瘋のやまひにかゝるものをとれにつれてきたるに癒やしたりといや
せり五 ガリラヤとデカポリ ユダヤ ヨルダンのむかうよりおほくの人ぐ
がしたがへりぬ

第五章

耶蘇おほくの人をみて山にのぼり坐したまひしにその弟
たちこれにちかよりねををしへたまふ

ひとへ三こころのうちつくるものハさいそひあるものなりいくと
とゐれバその人の國ハ天國ゐまバなり四かゝるむものハさいそひ
あるものなりいくとなれバその人ハあぐさあをうくべきもの
ゐまハなり五柔和あるものハさいそひあるものなりいくとゐまバ
その人ハ地球をあひつぐべきものゐまバなり六飢渇こゝろく
たゞしきをもとめるものハさいそひあるものなりいくとゐまバ
その人ハ盈らるべきものなれバなり七あはれむものハさいそひ
あるものなりいくとなれバその人ハあはれをうくべきもの
ゐまだなりハこゝろのうちいきぐさうあるものハさいそひなる

ものなりいくとなれバその人ハ神をみるべきものゐまバなり
九和睦をもとむるものハさいそひあるものなりいくとなれバその
人ハ神の子とゐまらるべきものゐまバなり十たゞしきことの
ためにせめられるものハさいそひなりいくとゐまバその人
の國ハ天國ゐまバなり十一わるなんぢらをのゝしりせめ
いつわりてさまゞくのあしきことをいひてなんぢらさい
そひあるものなり十二よろこびよろこぶべしとゐまバ天にてなんぢ
らのむくひおほいなるバなりあんぢらハさきのゝびんしやの
せめられしものなりかくのごとくゐまバなり十三なんぢらハ地のしほ

ありもの　とうそのあらくひとうなるいぞつそのもつる
かつてんその後ハ　たゞそこに　そこれ人こふまるのつる
るまやくにてどなんぐハ世のひとりもり山のうつる　たて
る城も　かくて　そこどあうとしてこまを斗下るおく
このなり燭臺こるさて家こあるそべてのものとてきまり
天かくのごくひぐのまくなんぐらのひとりとかぐやせそれ
ぐ人ぐなんちのうるおこるひをそ天こまきまをんぐら
の父とあゞむべられさそとらげんとをるためこうこ
まりとなるこなれをつるあるぞうつてかるんたるる

こうこれるこまにたんぐにつげん天地のつこざるうらる
おこるの一點一畫も遂てくこぞてきつべくぞゆるる
このいまめのいるつてちひさこひとをやづてくこんこるる
るものハ天國こおいていたつてちひさこものいるこんおそお
こるこて人こをゆるものハ天國こおいてこまとおりひるる
るものといるぐ　二十　るこなんちにつげんなんぐのこ下さ
こぐくやとパリサイの人のたゞこるるそれぞんど
こるぐぞ天國こいくこるかるかぎ　三　一つの人こるる
をるれまくこるるそるものハ審判こあづくんこいひこと

なんぢらのごとくしてこころなり三さりあるべきなんぢらもつぢんをつてめぐるべくその兄弟をいるものハさだめきたにあづうべ〜まさにその兄弟とラカといふものハ評定にあづるべ〜またたくひのごとくいふものハ地獄の火にあづるべ〜三ゆえになんぢらをそのものと壇にたづさへそこにて兄弟のなんぢについてこころもとなくおもひいださバかたに壇のまへにそのものを置ゆきてまづなんぢの兄弟とあひやわらぐべきをおこなひてなんぢのそのものとあげて五なんぢをうつるものしつまどぐちてゆゆしきこころやわらぐべきおそれハうつ

るものなんぢとたくべやくにこころしてもつぐべやくなんぢとこの役人にこころしてなんぢハひとやまいまれん六まことになんぢにつぢん分厘までもつくのこるべんバうるべきそこをいづこにもいまこの人に淫するあれといひてこころなんぢ〜のこころ〜ところなり元もつてあづこまなんぢ〜につぢんおそ色情をもつてなんぢをなぐむるものハこころのうちに淫せ〜ありき〜元右の眼なんぢをつくにおくべぬきいでてこれをもちいてこころもとなくバ五體のひとつをうしなふとも全身地獄にあげいまれんよりハまされり三十右の手汝と

つゝにおゝさバこゝをとゝうてゝゝゝゝるゝバ五體のひと
つとうゝなるハ全身地獄ゝるゝげいゝゝゝれんゝハまゝゝゝ
三ゝゝ人その妻といゞゝさバそゝに離縁ゞゝとあゝゝべゝゝいゝ
ゝゝれどゝゝゝゝんゞゝつゞん淫事のゆゑゝゝゝゝゝ　その
つゝをいゞゝとのハこゝゝゝ淫事あゝゝゝゝゝ

頬もこのれさーむけよ四十なんぢを訟へてもつ衣を
とらんとするものよりうつくしうれよらせさ
四十一人なんぢよ一里の公役を強ゐぐらしとともに二里
ゆけよ四十二なんぢよもむかうものよあらへよ借んとする
ものよハいるむなれ四十三隣をいつくしそあぐ人をう
らむべしといひをなんぢらこころなり四十四されど
ゐまなんぢらにつぐんなんぢらのあぐ人をいつくみ汝
らをのろふものたあるさらひをねがへなんぢらをう
らむるものよりさらをなーなんぢらよりふものと
せむるものためよいの主四十五さもれば天よりまもなんぢ
らの父の子なるべーいふとなるバその日をよりさものよ
もあーさものよりちーー雨をくだーきものとただ
らーざるものとにふーたまー四十六なんぢらをーいつく
しむものをいつくまざなんのむくひあーんやうつぎとり
もかくるざらんやもー四十七安否を兄弟のうにとそざるあん
のまされることあーんやうつぎとりもくなるざらんや
四十八さらバ天よりまーきをなんぢらの父のうをつくを
ごくなんぢらもうさをつくをべー

第六章

なんぢらのたぐひを人ぐにこえんとおもふ人のまへに
あるところをつくしめよ。もしぜんば天にまします
汝らの父のむくひをえんどにゆるさるべしとなり
さて人にあがめをえんとて會堂やまちにて偽
善者の風聽をうごくなかれ。まことなんぢらに
なんぢらつげんまつはそのむくひをうる。なんぢらほど
こをなすとき右の手のなすところを左の手にしらせる
なかれ。四そもしばなんぢのかくれたるを

五 みるまことに偽善者のごとくなるなかれいふとなればば
まつ人にこうまんあるに會堂やまちの隅にたちて
いのりをこむことをこのみまことになんぢらにつげんまつはその
むくひをうる。六なんぢいのるときに室にいりてとびらをとぢて
かくれたるいまをなんぢの父にいのれ。かくれたるを見たまふ
ふなんぢの父はあらはにふなんぢらにむくいたまふ。七なんぢいのる
人のごとくくりかへしごとをなすなかれいふと
ばまつはうぐおもふなればさまとおなじ

八 ゆゑよりまつりにならふことをあれいうまとあまハ汝ら
の父ハねごろぐるさてさてなんぢらのなくてかゝるぐるりの
をもりたまつり九 ゆゑよ左のごとくなんぢらいのるべし
天よりまましまつりの父わがくハ聖名をあがめ
させたまへ十 神國をちづうせたまへ聖意を天よりなるを
ごとく地もあらしめたまへ十一 つまつりの日ぐの糧を十二
今日もさづけたまへ十三 つまつりが人のつゝをゆるをごとく
つまつりのつゝをもゆるしたまへ十四 つまつりをこゝろみに
こゝちびきたまへ悪よりをいなし

たまへ國と權と威光とハあるものなくしてたまふ
ものあまハなり亞孟十四 いふとあまハきなんぢらひとの
つゝをゆるさゞ天よりまましまつりをなんぢらの父もなんぢらをゆる
したまへん十五 もしなんぢ人のつゝをゆるさゞハなんぢら
の父もなんぢらのつゝをゆるしたまへじ十六 なんぢら禁食をする
とき偽善しやのごとく憂さまをそるをあれいふとるなく
まつりハ禁食を人よりみせんとあるよりそいろをそこるなり
つまつりまこゝになんぢらにつゞんまつりハそのむくひをうる十七
さりあゞなんぢ禁食をするときたからをあぶらをつけ

ゆうをもつべーさそれバ人よなんちの禁食ハあるこまどそ
してかくれるまーまをあるんぢの父よあるこまんまーかくれ
たるよそまーなんぢの父あるこにあんぢよむくひまつべし
地ちよるこをたくくることなれをるハら蠱くひ銹くさり
ぬと人うごらてぬをむーころあり天よそたくくをたく
くつべけをるハら蠱くひ銹くさりぬと人うごらてぬをき
ぎるこころなり いふとあるバあんぢのたくのあるこころ
よこそこころをもーあるべけを身のひとりハ目ありぬえよ
あんぢの目をーあるこかなるバあんぢの全身あるこかある

べーなんぢの眼をーあるバ全身くるうるべしゆえ
よあんぢのうちにあるひかりもくくのバくらく
ぞや人ハふたりの主よつかるこあるこそいふと
あるをバこれをよくみるをといつくここれをもくみ
るををうむべけをバあるあんぢ神とたくにくる
つくるこあるこそ五このゆえよるをなんぢにつ
げんいのちのあるなるとのをまるハ身の
たあるあるを衣んとおるひるづくなれいのちハ糧
よりまるり身も衣よりまれるのあるこのあるこの

二六 そらの鳥をおひらいふとなれば蒔くぞ叫くぞ倉に
くくるぞされども あんぢらの天の父はこれをやしなひ
たまふなんぢらはそれよりいとそぐれたるものあらぬぞや
三〇 あんぢらのうちたれかおのれ尺寸をくわふることをえんやまた
くのづるくをえんやまた 二八 さあるゆゑに衣のことをお
もひわづらふや野の百合のいかにそだつかくこれそもハ
つもあぜ紡ぐせざれどこれ 二九 あんぢらにつげん ソロモンだに
もその栄をつくしてこの花のひとつだに粧ハざりき
三〇 神ハけふ野にありて明日爐になげいれまるる草
ぞもかくこそせたまへバまして なんぢらをやあ 汝ら
信仰うすきものよ 三一 ゆゑに なほ食ひものと飲ものと衣ん
とおもひわづらふことなかれ 三二 これ異邦人のこと
むるものなればなり あんぢらの天の父はこれらのものをなく
てかなくぞるものとしらるまへばなり 三三 あんぢらまづ神の
國とその義とをもとめよさらばこれらのものをも
あたへられんとなるべし 三四 ゆゑに明日のことをおもひわづ
らふなかれ明日ハ明日ハおのづからのことをおもひわづ
べし一日のあしさハ一日にまるる

第七章

あんぢらどうぢめらまぬやうう人をとらむるこなれいたと
あれば汝らが人をとらむるところのとがをもつてとがあらるべしといふ
とかれば汝らが人をとるところのとがをもつてとらるべし
三おのれの目の梁木をおぼえずしてあんぢ兄弟の目の
ある塵をとるや四おのれの目のうつぶりのあるいで
兄弟のなんぢの目のあるらりをとらまとらせといふ
らをえんや偽善しやまづおのれのめのうつぶり
をいぶしてそののち兄弟のめのうつぶりとらるんとあら

るる見べし六犬の聖なるものとあることなかれまた豕
のまへにあんぢらの真珠をなげることなかれおそらくは
足にてそれをふみうつてあんぢらをかみやぶらん
七もとめよさらばあんぢらにあたへらまんたづねよさらば
あんぢらあけんもんをたづねよさらばなんぢらひら
るべしいふとあればもとめてすむものはうけぶるる
そのまへひらるべし九あんぢらのうちにたれかあるこ
のうちられもしその子餅をもとむるに石をあらんや
やまた魚をもとむるに蛇をあらんや十さればあんぢ

ちあしきものをあんだらの子どもよ
あらうるとをるまして天にまとるあんだらの父はと
ひるものよりさきものをあらくぞんや十一ゆるるもべて人の
あんだらにあるとやうとおりふことはあんだらもろく人よ
あるべきことなりこと」おさてと預言者あるもだなり
十三せどさ門ちい」こいふとあるもバあろづるいるる
うちはのろくその門はおりひありられちいるものおか
十四いひるいるうちはあやまくくその門はせどくそ
のうらとうるのもくなし十五いつくりの預言者とつ

めよそれは綿羊のすがたしてあんだらにされども内心は
あらこさ狼なり十六その果よりてそもをとるべし葡萄
葡萄をとりあざみより無花果をとらんや十七かくもべて
よさ樹はよさ果をむをびまくあしさ樹はあしさを
むをぶ十八よさ樹はあしさをむをびをまくあしさ樹
はよさをむをぶことあくべど十九もべてよさをむを
ぐぐる樹はさられて火よるげいまるる十ゆるそのこ
よりてそもをとるべし十一るもを主やくいふこのん
もべて天國よいるぞるぞ天よまもを父の旨よ

をぐるまのいるべし三その日主やく主の名よりて
をへ主の名よりて魁をなしい主の名よりておか
くふぐなるをぐるをみせしよあるぞやとれよいよ
めおやうん三そのときはれうてるんぢとらぞ
あしさとなるものよるれをなれてあけとこれらよ
いふべし四ゆるよをべてるがうぐをうてそきをおこ
なるものを磐のうへる家をそるかこと人よたと
うん五ああり洪水いで風ふきその家よあれども
たそれどこるも磐をいしぞるとそれバあり六をべてるが

このうぐをきておこるものを砂のうへる家をた
てるおろかなる人よたとうんもあありおか水いでかぜ
ふきその家よあれバたそれてそのたそれハおかのかたり
六耶蘇このことバおそりたまふときあつまりる人ぐ
そのをへるおどろきあり元いふとなれバ學者のご
ときるあるぞして權威とりてるものごくれら
ととをへたまへり

第八章

耶蘇山をくだりしときおびゝくの人ぐこれよるふぐ

つりにらゝよ癩病のものきたり拜していひけるハ主もし
こゝろよかるゝならばわれをきよくしたまふべし三耶蘇手
をのべうまつひてこゝろよかるゝまといへり
をるゝこゝろその癩病やゞてきよくなるまり四耶蘇ゐまに
いひけるハつゝしんで人にいゝなゝぞゝでゆきておのれを祭
司にらせまゝうまつるに證據のためモーセがめいぜし
ゝゝろのそなへものをさゝげよ五カペナオムにいりしゝとき百
夫の長うまつてきたりねがつていひけるハ主もしゝもべ
癱瘋にて家にうちやまるゝをいたみるゝ耶蘇うまに

いひけるハわれゆきてこゝろをいやさんハ百夫のかしらこたへて
いひけるハ主にわれハあるゝにたらぬ家屋の下にいるゝるに
ものもこゝろぞこゝろにことバをいひたまふのみにてわがゝもべハ
いやべし九そもわれハ權威の下にあるものなりわがゝもと
もにつかものあり一人にゆきなされといへバ
きたるゝ者ゝこれをゝきたりいへバ奴十耶蘇きゝてあや
しみたまふものどもにいひけるハまことにあんゝにつげん
イスラエルのうちにもいまゝかくのごとき大なる信
あるゝぞ十二われなんぢらにいふおゝくの人ゝ東より西

ようきうり天國よりおいてアブラハム イサク ヤコブとともに坐
土國の子どもハ外のくらきよりおひいだされそこにてかなしみ
くるしみをあらそこと有べし 十三 耶蘇 百人のかたらにひけ汝が
信ずるごとくあんぢよなるべしといひけるバそのこにその
ちのべハいえり 十四 耶蘇 ペテロの家にいりその姑の熱病にて
ふしたるをみてその手にさわりたるに熱さめぬ女おきて
てうまつりをなせり 十五 日くれるとき人々鬼にとり
つかれるおほくのものをつれてうまやにきたれバ耶蘇ことば
をもて鬼をおひいだしやまひあるものをことごとくいやせり

預言者 エザヤがもちいたることばのごとくいはく
こころみるのやまひを負といひけるのさあなるかさて耶蘇
おのれをめぐれるおほくの人ぐをみてむこうのきしにわたれと
命ぜり 十九 ひとりがくしやきたりていはくハ師よい
づくへゆきたまふとこたへたまふ 二十 耶蘇これにいひ
けるハ狐ハあなあり空の鳥ハねぐらあれど人の子
ハ枕をするところなし 二十一 そのでしのひとり耶蘇にいひ
けるハ主よまづゆきて父をうむることをゆるせ 二十二 耶
蘇にいひけるハまづゆきて死たるものにその死

しるめをそうむしせよ三耶麻舟よのうーにそのでー
ふらこれよりてて四そよ舟みそそおうくまんとまるる
ごくさおうひるるやておこれりもるる耶麻ハいるもてる
五そのでーちそうれをおこーていひげるハ主まてる
をそうひたきへうろびんそと六耶麻まてにいひげるハ信う
そさめよるんぞおそそやつひよおさて風と海とをいま
しめておうひよおぶやたるまてる七人ぐあやーていひ
げるハ風もうそもまにちてはこれいるる人ぞや六耶麻
むうのさー ゲルゲセンの地
地よいるた鬼よりつれいる

さりの高の墓ちりいでこれをむうるるぶぶくーて
人そのちをそぐうそあるとぞ元ちよさけんでいひげるハ
神の子耶麻よあるくまてにおいてるんぞあづうんや
ちきいてうぞるにまてをせあんそこにさるや七家の
おうくひてうぐうるまちちちるにるして食せう
三鬼耶麻よねびていひるハをーまらをよひいるさば
家のひまこいるそをいるせ三りまちにあけといいるる鬼
いでー家のひまこいりぬちる家のひまハ坂ちり海よあけ
おちて水よ死しぬ三牧ふあどもよびてむーにいりこの

こゝ鬼ごとりつれしものあり一こゝをつげぬる邑のものこぞつて耶蘇を見るいでれをそこのさるひとゝ
るをねがつり

第九章

耶蘇舟よりあがりこゝろゝてゆるさゝにいまゝこゝろひとゝ
癩瘋ゝて床ふしたるものを舁ゝさるる耶蘇ゝまゝの信
ぞゝをゝて癩瘋のものゝいひげる八子ゝこゝろやゝすれ汝の
つゝゆるされり三こゝあるがくしやゝちこゝろのうちにこの
人ハげゝをこゝゝをいゝとおりゝ四耶蘇そのおもゝくゝをもつて

いひげるハなんぢゝいうあれバこゝろゝあゝさをおりゝ五それ
なんぢのつゝゆるされゝとゝいゝこゝゝおゝそあゆめゝいゝこと
といづゝゝやゝそゝやゝ六そもゝ人の子地ゝおいてつゝゝゆるゝもの
權あるをもゝせんゝそつゝひゝ癩瘋のものゝいつゝおゝそ床
をゝりなんぢの家ゝゆけゝゝまゝるゝちおゝそその家ゝ
あけり人ゝぐゝゝあやゝしゝかゝのごゝさちゝゝを人ゝまひ
し神をあがめり九耶蘇こゝりをゝゝマタイとゝづゝる人
稅關ゝ坐をゝるをゝゝこゝ邑にをゝいげゝ(といひげゝ)バこゝて
をゝこゝづゝり十耶蘇家ゝ食をゝるゝゝゝゝゝ稅吏つゝある人

おろかなりて耶蘇とその弟とともに坐せり十一パリサイの人これをみてその弟子いひけるはなんぢらの師はいかなれば
うつばりものつみある人とともに食をするや十一耶蘇きこしめしてこれいひけるはさいやくをもつるものは醫師のたぐひをたのまずしてやまひあるもののみをたのまむとてなり十二ゆきてまなびてこれいふこころのゆきまるべしとはこれいはるこころのゆきまるべしとはこれいはるこころのゆきまるべしとはこれいはる

酒をいまして、ちゝをのゝしるめなり六耶蘇うまれ
ることをいまさるある窟さゝり拜してうまにひ
げをはつゞひもあいまこゝや死せんとをさゝりてうまる手を
つけたまくゞ生べし九耶蘇こゝちてそのでゝとうまにうまる
ちゝをり二十三年血漏をつゞひる女うゝちる
ちゝをりてそのこゝろものをそにさゝりぬ二いふとなるまゞ
もゝこゝろをゞたるさゝゝばいえんとおもくゞあり三耶蘇
ちゝをり女をとゝていひけるはむをあやゝちゝやをゝん汝の
信汝といやせりをゝら女こゝゝゝゝいえゝり三耶蘇

そのつゝの家をいゝゝさ箇をゝくゝのと人ぐのさゝゞさ
をゝて四まゝにいへけるは退よそまむをあはは死をゝにあゝ
ぞゝでいねゝり人ぐ耶蘇をあゞゝゝり五人ぐいゞゝれ
しのゝいりてその手をゝりして少女おゝゝゝり六このゝゝえ
あまねくその土地をのゝまれり七耶蘇こゝをゝゝゝさゝり
の目をひをゝゞひていひけるはダビデのをゝやゝまゝを
あゝれこゝまゝ八さて家をいゝるに目をひゝゝゝければ耶蘇
ゝまゝにいひけるはこゝれはゝゞゞなゝゝゝゝこゝ信をゝゝかを
をいひけるは主をゝり九をあゝゝゝまゝの目を手をつひて

いひけるハ汝らの信ぜざるゆへなれと三十そのまなこ
ひらけり耶蘇まらにさとびくいまめていひけるハ人の
ちからぬやうにつゝしめよ三十一れども見ていでゝあまねく
その土地に耶蘇の名をひろめ三十二ていでさるとき人
ぐ鬼にとりつかれる啞唖とつれてきたるに三十三鬼
おひいだされて啞唖をいつる人ぐあやしいひけるく

イスラエルのうちにいまだかつてかくのごとくハ三十四パリサイ
の人ら鬼のかしらにとりて鬼をおひいだせりといつる
三十五耶蘇あまねくむらざとをめぐりその會堂にをしへ

天國の福音をひろめ民のうちにあらゆるやまひをなおしつ
ひといやせり三十六人ぐをみてあはれをぬきてハ牧ものなき羊
のごとくなやみまどひちりぐになりぬ三十七そのときさ
でしにいひけるハまことに穡ハおほくしてそこなひの
ハすくなしゆゑに穡の主にそのうりれをそこなひを
のとつかはさんことをねがへべし

第十章

さて耶蘇その十二でしをよびまつりてけがれる鬼ども
をおひいだしまたそのやまひをなおすことをいや

そのちゝをとらまつりニそれ十二の使者の名左のごゝとし
めハペテロといつるシモンとその兄弟アンデレ ゼベダイの子ヤコブ
とその兄弟ヨハネ子三ピリポ バルトロマヒ トマと 税吏マタイ アルパイ
の子ヤコブと タダイとゑづくるシモン四カナンのシモン イスカリヲテ
のユダこれハをのゝ五耶穌この十
二をつかはしまつに命じていひけるハ異邦のうちゝ
ゆくなかれまた サマリヤ人のむらもいるなかれ六むしろイスラエル
の家のまよひし羊にゆくべしゆきて天國ちかくたれり
といひのろめよハ病をいやし癩病をきよくし死せる

とをみがゝせ恩をおひいだせうけたればたゞうけ
べし九汝らの帯に金また銀また銭をもつのるなかる
也十また旅ぶくろ二つのちゝ衣履杖もまたとりそれ
くゝくものハその食物をうくべきものなればなり十一をべて
ひとゝぶとにいるバそのものまろしさものをとゝぶねていづるま
でそこにとゞまれ十二家にいるとき安否をとゝ十三をその
家にゝるバ汝らのやをさハそこにいたりまでとゝまれ
ぞんバ汝らのやをさハおのれにゝ十四西をし汝らを
うけぞ汝らのことゞをとらざるものあるバその家またハ

むしをさるべき足のちりとくべ十五まことに汝らにつげん審判の日ソドマとゴモラの地はこのむしりあかやをうるべ十六きよりも羊を狼のうちにいるごとく汝らをつかをゆるよ蛇のごとくさとく鳩のごとくをまとめしれもつて人よこころをつけよそれ人汝らを裁判所にゆだね十七又その會堂においてむちうつべけもバるり十八まことにあたに奉行および王のまへにひいてゆくべしそれもつて異邦人に證據となるためなり十九人汝らをひきわたさいやうにまたなにをいはんとおもひなかれいはんとおもはバいはるべき

ことをその時汝らたまはるべし二十それ汝らをいはるるにあらずあらずして汝らの父の靈汝らをいはしむるなり二十一兄弟を死にまでまた父は子をまたしまた子どもは二親を訴てこれらをころさせん二十二また汝らはすべての人に惡まれんさりながらおくりまでものはあるべけもバ二十三人この町より汝らをせめバかのむこうにまたにまたにまた

ごとくあらバ足べ一人あるゞとベルゼブルとなづけバ
きゝてその家のものをやゝゆゑよりまつりをおそれ
いつまとゐれバつまれるものハあゝそれかれるものハ
とられざることゐられバなりもれ汝らにくゝさたづげ
ることハあるゝさたのごゝ耳ゝよゝさゝ一ゝこゝハ屋のうへゝよりひ
ひろめゝ六身をこゝろてし魂をこゝろをこゝあゝそぎるも
のをおそゝゝなれ寧たまひと體ゝを地獄ゝよりろぼ
ちゝゝとうるものをおそゝまゝよゝ二羽の雀ハ一錢ゝそうゝ
ざんやその一羽も汝らの父のゆゝさざんバ地ゝおつる

ことあるまで汝らのかゝの髪もこゝみかぞへらるゝゆゑゝお
そゝゝなれ汝らハおゝゝの雀よりもまされりゆゑにそゞ
て人のまへゝよりれをゝゝとゝいゝんのハゝまゝもまゝこゝゞ天
ゝまゝまゝも父のまへゝよりまゝ
ゝまゝをゝゝゝいんのハゝまゝもまゝ天ゝまゝまゝも
ゝゞ父のまへゝよりれをゝゝゝといゝべ一ゝまゝ地ゝよりゞ
やゝをいゞゝんゝあゝこゝさゝゝゝおりゝゝなれなゞやゝをいゞ
ゝんゝとゝあゝゝぞゝへゝつそ双をいゞゝんゝあゝこゝさゝゝゝ
三五
そゝゝゝゝれ人をその父ゝよりそむけ娘をその母ゝよりそむけ

嫁とその姑とそむくせんとあるこころなり 三六 人の仇はその家のものなるべし 三七 汝父母をいつくしむものは汝よりもそれをいつくしむものなり 汝女をいつくしむものは汝よりもそれをいつくしむものなり 三八 その十字架をとりてわれに従はざるものは我にふさはしからず 三九 そのいのちをうしなふものはこれをうしなひ我のために其のいのちをうしなふものはこれをとりもむべし 四〇 汝等をうけるものは我をうけるなり我をうけるものは我をつかはせしものをうけるなり 四一 預言者の名によりてよげんしやをうけるものは

よげんしやの むくひをうくべし 四二 義人の名によりて義人をうけるものは義人のむくひをうくべし 門徒の名によりてこのちいさきものの一人に冷かなる水いつぱいをのませるものはまことに汝らにつげんそのものはそのむくひをうしなはざるべしなり

第十一章

耶蘇その十二の門徒をよびおくりしときそのむこうにおいて道ををしへいろめんとあることをとりぬ 一 そのとき 二 獄中にてキリストのわざをきそのでし二人をつかはして

三 ものをまくん 四 耶蘇うまつにこうていひひるハ聞えるところ
のうちをゆきて ヨハン子よりのちそべ 五 目とひハ見え 跛者ハあ
ゆき 癩病 ハさとくつんづうハきこえ死しるものハうみが
つりまづしさのよハ 六 福音をうけやり 七 ものにうりてつま
づかざるものハさいわひなり 八 まつかつりのち耶蘇ヨハン子に
ついて人ぐよいひいでけるハをうんとて野よいでや風よ
うごうさるあしあるつなることうんとていでややくうさ
ろもとさろる人あるうこやくうきうえもをこさるものハ

王 ちの宮よあり 九 あるとうんとていでや預言者あるう
實もあんちこつびんよんしやうそれうるのいうそれ
うよりもあ 十 汝のまくよ道とうるるつひと汝のまくよお
くうとうるれうるのハうまあれバあり 十一 まうに汝らに
つびん女のうたるものうちにいまぐ洗禮とあるヨハン子よ
りおうひあるものおうそもうなぐ天國のちいさき
ものハうれうりおうひあるものあり 十二 洗禮とあるヨハン子の
ときうりうう今よいうるまで天國ハくうげうとうれくびむもの
ハうれとうるべし 十三 それをべうの預言者と律法ハヨハン子の時

まぞうげんせいれいバあり西を〜汝らコトごとくとうくるとこのまぞくそくるべきところのユリアハこれあり十五ラ〜耳あるものハきくべし十六コれらの世とあるたとつんや童市ヨ坐〜てその友とともにて汝らヨ笛と吹くおどるぞ汝らヨなげくぞ汝〜むのうぞといつる似ようそまヨハシ子食ぞ飲ぞ〜てくそれバ人ハ鬼ヨつれしものと又つる十九人の子ハ食飲〜てこれバ人ハうヨ食をたしみ酒とのむものヨて税吏おもびつるものと友なるといつるきまぞくさくさハその子どもそうとせれつる三十そのくさ

耶穌おろくの不思議なるコトぞをみたまひるむくく悔あくあざるヨようていまうしめいひいそひるハ三コトごとひるるみコラジン コトごくひなるるみベツサイダそれ汝らのうちヨなたるが不思議のコトごをタイロとシドンヨあれしなくバ疾より麻を着灰を身ヨうひてくひあくむべきものと三それどもこれ汝らヨつげん審判のヨタイロとシドンハ汝らよりもあややそくるべ一三天ヨあげられるカペナオムヨ汝冥途ヨおそさるべいるまとれバ汝ヨなくるふしぞのコトごをソドマヨなせるあるバ今日までくるつべきものを二四それどもこれ汝らヨつげん審判

の日ヨソドマの地ハ汝らよりもやすきべし　そのとき耶蘇こゝにていひけるハ天地の主なる父よこのことをかくしてさとさのに隠し幼稚なるものにあらはしたまふを謝す父よ

げにもたりそれかくのごとくハ父のおぼしめしなるゆゑなり　萬物ハわが父よりあつけらるゝ父の外子をしるものなく又子と子を父をあらはすをのゝ外父をしるものなし　すべてつかれるものまゝおもきを負ふものハわれにきたれ汝らをやすまべし　わが軛を負てわれにまなべそれ我ハやさしく和

うべし　それゆゑ軛ハやすく荷ハかろしバなり

第十二章

そのとき耶蘇安息日ヨ禾田をとおりしにその弟子らハ飢けれバ穂をつゝ食ぐゝめり　パリサイの人これをみて耶蘇にいひけるハこゝ安息日ヨあるべからざることなり　耶蘇ハいひけるハダビデとそのともの飢たりしとき如何せしかをまなびたるや　いかに神の殿ヨいりて祭司の外おのれあるひハともの食べからざるパンを

餅をくゝつり五まゝ安息日に祭司ハ殿のうらにて安息
日をおこなはせもつをなさゝるを律法におそるゝやう
六日まゝるんだゝにつゞん殿にりおこなひあるものゝうにありセ
れあゝれをこのゝて祭をこのまゝとこのこゝろをとゝバ
つゝるゝめをつゝせぎるべしハそゝ人の子ハ安息日の主
なるゝバなりルこゝをゝりてゝうまゝの會堂にいるゝ十こゝ
かゝゝ手なへゝる人ありけゝバゝゝ耶蘇にらひゝるハ安息
日にいやゝをこゝハなゝべきこゝこれゝまゝを訴んとゝるゝ
ゝあるゝ十ゝまゝゝにいひけるハ汝らのうちひゝゝの羊をゝ

のその羊安息日に坑におちいゝバこゝまゝをとりあげざるゝ
十いゝに人ハ羊よりそぐれたるものゝゝぞやゆゑに安息日ゝり
ゝゝをなるとハゝ十ゝまゝひこそのの人に汝が手をのべゝといひけれバ
のべゝりそるゝゝ外の手のごゝくゝいゝゝり西パリサイの人ぞゝ
いゝにゝゝる耶蘇をころそゝゝやゝあひゝゝれり十五耶蘇これを
ゝりてこゝをゝゝにおゝくの人ゝゝこゝまにゝゝゝりゝまゝゝ
をゝるいやゝゝり十ゝなれを人に人にあゝゝゝをゝゝゝぞといまゝ
めりもこゝにゝゝんゝゝや耶ザヤのいひゝゝゝバにゝるゝゝいゝ
くゝゝこゝにゝゝゝ

その子らまに〻ヨカ靈とあく〻異邦人よさでさをとつあら
をべ一九うまハさそそんで さひでで人ちまうよおいてその
こえとさくまで二十たでしくさを勝とげうをるまでいくみ
一葦を折ドひまる森をひさで二一異邦人もその名よ
うべしと二二うに鬼ようつれるあくの噛あるその
つまくれて耶魇うこくれうめちひうて噛あるものをりのひ
見ひやくよいやせり二三人くくるあやくてこれダビデの子
よあくをやといつり二四パリサイの人ていひるハこの人ハ鬼
のかくしベルゼブルとつくぶれハ鬼をおいでくさで二五耶魇その

おもくくとちりてまつにいひけををべてあひあくそよ國ハ
あくくくありをべてあひあくそよ邑や家ハうつべくくを二六
をくサタナサタナとおいいくさで おのまとあひあくそよるり
ちくくバその國いくでうつべくさや二七もくれベルゼブルよりて
鬼とおいでくさバ汝らの息子ようれよりておいでをやゆをよ
くまくハ汝らの裁判人ようべ一二八もくまを神靈よりて鬼
とおいでくさバ神の國汝らにくやのぞり二九あるひい先つくさ
のを縛らざれバつくさめく家よくりいくでその道具を
うぐくよくくとえんやその後ようくそその家をうぐくよべけま

三十 ゆきとともにあしざるものハうまをそむこうまとともに
あつめざるものハちらしをあり三ゆゑに汝らにつげんをぢて人ぐ
のおしへるつみと神とけがしをこしとハゆるさるまじ人のこをそむきて
聖靈とけがしをこしハゆるさるべからぞ三人の子をそむきて
いまのハゆるさるべし聖靈をそむきていまのこの世をお
いてもまた後の世をおいてもゆるさるべからぞ三あらひハ樹
もよくその實もよくせよあらひハ樹もあしくその實も
あしくせよいたとあれバ樹ハその實によりてしる
べし三四あゝ蝮のこゝろよ汝ら惡しきていまだ善こゝろをいま
べけんやそれこゝろよりくちにいまのなまバなり三五
よき人ハこゝろよりよきことをいだしまたあしき人ハ
こゝろよりあしきことをいだす三六われなんぢらにつげん
人のいひしもぐさのむだこゝとごとく審判の日にそれについて
うちあらそべしそれなんぢらのことばによりてつみとなりと
せられまた汝のことばによりてつみをあらとせられべしぐ
なり三七ときにある學者とパリサイの人こゝていひけゝく
師よしるしをつ汝らのもとめとうんとうつを三八こゝてこゝ
らにいひけゝく姦惡なる世ハしるしをとりもむまども預言

者ヨナのもろ〳〵のうちもろ〳〵とともにあるべし　四十
そもヨナハ三日三夜巨魚のくらのなかにあり　ごとく人の
子も三日三夜地のなかにあるべし　四二　二子べの人この世とともに
審判もろもろてこの世をつくるにさばむべしいまとなりばれら
ハヨナのいひしことをきりて悔あらためたるにこと
ヨナよりまされるものこゝにあり　四三　南の女王この世とともに
さばくさにこゝてこの世をつくるにさばむべしいまとなればれハ
地のくにより　ソロモンの智恵をきくためにきたれりこと
こゝ　ソロモンよりまされるものこゝにあり　四四　惡鬼人よりいでる

こゝ水なきところをまくりてやすきところをもとむれどもえず
四五　ゆへにいでゝ家にかへりんといひそのくにかへりてみバ
明くるゝ掃除してまくかざりたるを見　四五　ついゆきておの
のもとりあしき七の惡鬼ともなひ入てそこにをるその
人の終のありさまハ前よりもわるくなるべしこのあしき
世もまたかくのごとくなるべし　四六　耶穌人ぐにかたらるこ
こゝその母と兄弟そとにたちてそれにものいはんとかつを
四七　ある人耶穌にいひけるハこゝあるなんの母と兄弟あるに
いはんとかつてそとにたちて　四八　つげものこゝにいひけるハ

ゝゞ母ハ[illegible]ぞまゝゞ兄弟ハ[illegible]ぞや四九手をのゞ〳〵その
でたちよさそいひけハらよゝゞ母と兄弟なり五十いゝふと
あれバゝゞ天ゝまゝまゝ父の上の昔をおこなゝものハそまこそ
ゝゞ兄弟ゝゞ姉妹ゝゞ母なれ

第十三章

その日耶蘇家をいで〳〵海べゝ座せりニおゝくの人ぐゝれゝ
あつまりきゝりけまバ耶蘇舟ゝのりて坐しをべての人ぐハ
ゝゝにたてり三耶蘇〳〵へとまゝて人ぐゝよまぐのことを
ゝゝりそいひけハらゝたゝまくの蒔ゝいぐゝゝ四まく時ゝ

あゝゝゝハらのゝりゝおちゝれバ鳥ゝゝて啄つくせり
五あゝゝゝハつちをゝゝゝおき磽地ゝおち土ゝをけしだたぐちにはえ
いで六日いで〳〵やれ根あけまバゝまてゝりまくあゝゝねハ棘の
あゝにおちていぐゝゝそぐちゝまをゝゝけりハまゝあるた
ねくゝゝき地ゝおちてあゝひハ百倍あゝひハ六十倍あゝ
ひハ三十ぐいみのまゝり九ゝゝく耳あゝものハきくべし十門徒
ゝちゝゝりてまゝゝいひけるハあゝゆゝゝゝゝくをもて
まゝゝゝゝゝゝや十ゝゝていひけるハ汝らゝハ天國の奥義
をゝゝせたまゝまゝゝまゝゝゝゝハゝゝせたまゝゝざれバ

なり十二 そもしりつるものハあらじへられあかあまりあるべしりぬのハまゝしりつるものまぞもとらるべし十三 うまらハ見てこゝえぞさてこゝえぞさらざるゆゑよろれこゝをもつてうまらにいつり十四 耳ザヤのよげんよ汝ハ耳よりきゝけどもさてらぞ目よこゝれどもこゝえぞ十五 そもしこの民のこゝろハかたくなまて耳ハこゝろく目ハとぢこゝりこゝれその目まて見耳まてこゝこゝろこゝそさてりあらためてうまうまてをいやこんこゝをおそゝとかくいつるよかるつりかるつり十六 汝らの目ハ見耳ハきくゆゑよ福なり十七 いつこゝとなれバまこゝに汝らよつげんおかくの預言者とたゞしき人ハ汝らが見こゝろをこんとおつをまゝども見こゝをえぞ汝らがこゝこゝろをこゝこんとおつれども こゝをえぞりき十八 ゆゑよ汝らたるゝまこゝのたゝへをこゝけ十九 天國のをしへをこゝてさてこゝざるものハあしこゝをのこゝろてそのこゝろるまれこゝるものをうゞよこゝれこゝのこゝりにまこゝたるものなり二十 いゝ場よまれこゝるものハこゝれをしへをこゝをやにこゝをとろこゝびてこゝるものなり二十一 をしへなゞこゝおのをこゝる根おくしてもゞこゝくなるものゝれバゞこゝつのこゝる難義あるひハせあこゝをこゝの

おうるさまよハそをやうよみちよつまづくのなり三まさ
棘のあたまれさるこのハこまをへをさけどもこの世
のこころづひまきたくるよあざむくこをへと
さざてこのしざるのなり三ふき地よまれしるのハ
これをへとさてさり百倍あるひと六十倍あるひハ
三十倍もこのあり四まこくへとうまるよもあて
いひけるハ天國ハくるけよふきたるとまく人よ似たり五
人ぐいふうちその敵こうり麦のあるかるを麦を
ちそさまり六敵生じてこのりこるさかるを麦も

あるいあるれり七あるじのもるべこうりていひけるハ主よ
くるけよハこさたるとまるざりしかるを麦あハいづこより
ぞや八もるべよいひけるハあるじ人これをもせりともるべあるじ
よいひけるハもるバまるゆさてくるざることをつもるや
元否おそくハ汝らもを麦をくるさざりて麦もまくこともに
あるん十りいまでふるつるあがるそぶておくべしり
いるこさこれるのよ先るを麦をとりあつめて
やくやうよつね麦をバまるがくるにおゃあるいそん三おくし
たくとうまらよもあしいひけるハ天國ハ人芥種をとり

てそのくちびるがごとくにして三るづのくちびるのごとくにして
さくらのとゝのごとくにして おのれなる
めのまへにそゝの鳥さらりてそのえだをやどるやどの樹
となれり三三 まことにかゝりけゝ天國ハ婦
三斗の粉をもりいまてまつゝくゝたる麹のごと
三四 耶蘇 こゝをもて人ぐゝをそゝのこゝろをこゝろたまへ
まことにあゝぶれバまことゝかゝりたまへど三五 これを
げんしやをもりていまこゝるこゝバをまこゝをまう
けて口をひゝき世のくゝめをもりかれこゝとをいひぬ

といひしゝのゝ人なり三六 つひに耶蘇人ぐゝをかへりて
家にいまりそのでしこれをこゝりていひけるハこゝけのかゝを
麦のこゝとをまこゝをこゝたまへ三七 こゝこゝてこゝにいひ
けるハこゝたるものハ人の子なり三八 こゝけハこの世
界なりこゝたるものハこゝまこ天國の子どもなりかゝをひぐゝく
惡魔の子どもなり三九 そこれをまく敵ハ惡魔なりかり
いまこハ世のおこりなりのるものハ天のつゝひこゝちなり四〇
を麦ハあつめて火にやこゝぐゝこの世のおこりにおいても
くのごとくなるべし四一 人の子をつゝひこゝちをつゝてその

國のうちうをぐてつまづくるものとそむくこうをなると人
をあつめて四三これを爐の火にるべいるべーそこそかみー
みまゝ歯がをそこと あるタべー四三そのときたゞしき人その
父の國において火のごゝかがやくべーそこ耳あるものハこく
ぐーきゝ天國ハくるひにようくれくるたゝのごゝ人これを見
いぐせバくゝーてよろこびきゝてゆきそのりてるものをこな
うりてそのくゝひを買ふまゝ天國ハゝゝき真珠とりめんと
をるあゝうどものごゝひとつのあるゝゝき真珠を見いぐ
せバゆきてそのりてるものをこうりてこゝを買ふ四四まゝ天

國ハ海にようらてさゝまぐくの魚をとゝる網のごゝをぐたゝら
ゝるゝゝハゝゝにひきあげをりてゝゝきものをうつくにれ
あーきものををゝゝり四五世のおくりにおいてもくのごゝく
あるべー天のつゝひゝちいぐゝたゞーゝきあゝうゝりあーき
ものどゝりにひ五六爐の火にるこれをあげいるべーそこそかみ
ゝゝと歯がゝをゝとあゝん五七耶穌ゝまゝゝゝいひけハ
ゝゝこのゝをきゝりーやうまにいひけハ主ゝゝり五八耶穌
ゝをゝゝにいひけハちゝきバをぐて天國につゝてをーこれ
ゝゝぐくしやハあゝゝゝきものとゝるきものをその庫ゝゝり

いづこ家のあるじのごとくといひおくり五三さて耶蘇このことをきかれり五四その会堂においてその人ぐのあやしむばかりにをしへたまひけるバ人ぐいひけるこの人ハこの智恵と力ぎなるこゝハいづくよりぞや五五匠の子にあらずやその母ハマリアその兄弟ハヤコブヨセシモンユーダといくぞや五六その姉妹ハこゝにあらずとこゝなるこゝろぞやこの人ハそこそこのことハいづくよりぞや五七つひにこゝろにつまづけり耶蘇ゑまつりていひけるハ預言者ハその郷里とその家のうちにのみ尊ばれざることなし五八信ぜざるゆゑにそこにおゐてのわざなるゆゑをこゝになしたまはざりし

第十四章

そのとき國のこゝろをおさむるヘロデ耶蘇の評判をきゝその家來にいひけるハこゝ洗禮のヨハネ子なりけるかぐりゆゑ彼によりておそはざるゆゑをおこなへり三そもくヘロデその兄弟ピリッポの妻ヘロデヤのことによりてヨハネ子をとらへ縛りてひとやにいれたれバなり四そハヨハネ子ヘロデにこのをんなをめとるハよろしからぬことをいひしゆゑなり

五ヨハン子をころさんとおつせられども民をおそれおそれこれを民ハヨハン子をうやまひ尊ミそれバなり六ヘロデの誕生日をいとひしくさくヘロデヤのむすめその坐上ニ舞てヘロデをよろこばせりゆゑ[illegible]あまたもりもむるところのものとあらんとちかひて約せり八ヘロデハその母ニそそのかられてあらかじめバ洗禮のヨハン子の首を盤ニのせてこたまへられといへり九王うまひけれどもちかひとまさるに席上ニをるものゆゑニあらためることを命ぜず十ときに人をつかはしてヨハン子の首をきらせり十一その首をもちきたりて

のせてひとりのこゝあるこゝへ出ればこれバむすめハこれをその母ニさしげり十二ヨハン子のでしたちきたりて尸をとりてうむりゆきて耶蘇ニつげたり十三耶蘇これをきゝて人をさけてさびしくさとこゝへ舟にてそこをさりたり人ぐきこれをきゝてむらくをゝぞ歩行にてこれにしたがへり十四耶蘇いでゝおゝくの人を見あはれみたまへてそのやまひをいやせり十五日くれてそのでしたちきたりていひけるハこゝハさびしくところすでにとき[illegible]ぞそれ人ぐむらくニゆきて食ものをもとむるあこいでたまへ十六耶蘇うまたまへるハいひけるハあくにおよぐぞなんぢら

食物をもてにあへる耶蘇こいひけるハ五まてにて五のぱんとふたつの魚のみあり大耶蘇そ五をこゝへもちこゝにいてゝ九草のうへにせられと人ぐに命して五のぱんとふたつの魚とをとり天をあをぎて謝ぱんをさいて門徒にあたへてハ人ぐにあたへたり三そのあまりたる屑をひろつり三をんなと子どものたくさんひしものハおよそ五千人なり三やて耶蘇人ぐをうへをそうちにてと舟にのせむうみのさきへさきたてたりしあたり二三

たりて人ぐをうへたまひけるバいのちをすくひとりふて山にのぼりたり日くれてひとりそこにいませり二四舟ハ海中にて逆風のゆへに浪にてこまれたり二五夜七時ごろ耶蘇うみのうへをあゆみてでしにいたり二六でしそのうみのうへをあゆむを見おどろきてそれ變化のものなりといひおそれてさけびたり二七やて耶蘇ものいひてこたへていひけるハこゝろやすくれ我なり恐るへからすペテロこたへていひけるハ主よもしあなたなるバ我を命じてあなたの水のうへをゆきめくへき二八それといひけれバペテロふな

よりくだり耶蘇よりてんとそて波のうへをあるきしに風
のつよけれ　さとをそれをづつをりけれ　ハさけびて主
をまこと　たすけたまへといふ　三　耶蘇やゞて手をのべうを
とらへていひけるハ信ぞるのうをとをきものよ　三　なんぞ
うたがふやまて　舟にのりけれ　ハ風をづまをり　三　舟こ
をりしのちをりこれをとらひてをがみていはく神の子
なりといふ　四　をのくらをりてゲネサの地によりをれり
五　そのところの人ゞ耶蘇をとりてそのところの四方に
人をつかはしてをべて病のものをつれをりこて　六　耶蘇

の衣のをををさをるををををぬがをりをるををちをさをるをのハ
みないやされをり

第十五章

さて　ヨロルマのかゞくしやとパリサイの人と耶蘇によりていひ
けるハあなたの門徒ハいかなるをこのをををハなんぞや
をを食をるをさをたをその手をあらハざるハかりこて　三　
らにいひけるハ汝らハなぜ汝らの傳をもりて神のいましめを
おををハなんぞや　四　をを神いましめて父母をうやまへまた父
母をのををるものハかならをををををとのをまへりをれども　五　をんゞら

新約聖書　馬太傳

明治十年刊

ヘボン訳　S.R.ブラウン　奥野昌綱協力

明治三年以来ヘボン Hepburn は四福音書飜訳に着手。のち
ブラウン、奥野の協力を得、明治五年秋　馬可、約翰傳を、聖
六年始　本書を上梓せるものにて、禁教裡に横浜にて印刷せる秘密
出版なり